駒場友の会

会報第13号

「食から見る日本と世界」講演会

四月十七日(金)に、「美味しんぼ」の作者である雁屋哲(かりや　てつ)さんをお招きして、友の会主催(教養学部附属教養教育開発機構共催)の特別講演会を開催しました。

雁屋さんは、教養学部基礎科学科の卒業生。「美味しんぼ」は、単行本としても刊行され、累計一億冊を突破した大ベストセラーです。

現在オーストラリアにお住まいの雁屋さんは、久しぶりに駒場までお出でになり、東京の街や日本人の生活意識の変容に驚かれた様子です。自分の「食」と向きあうことが現代の歴史や世界に目を開くことになると、ユーモアあふれる口調で講演されました。

参加した友の会会員・会友や学生二百名は熱心に聞き入り、講演後も活発な質疑とサイン会で大いに盛り上がりました。

新入生父母と学部長との懇談会

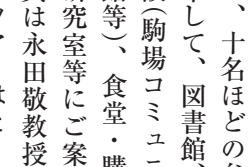
今春入学した学生のご父母と教養学部長との懇談会を五月二三日(土)に実施しました。

駒場友の会では、毎年入学式会場(日本武道館)で入会案内を行っています。入会されたご父母の方々に大学の様子を知っていただくためにこの懇談会を開催し、今年で四回目となります(なお、今年度の新入生ご父母の入会は三二〇名、懇談会の参加者は一六〇名でした)。

冒頭の講演で山影進学部長は、教養学部の発展の歴史を辿りながら現在における教養教育の意味と魅力について説明を行い、参加者は大いに興味をそそられたようでした。

その後、キャンパスツアーが行われました。学部長以下、約二〇名の教員が、十名ほどの参加者のグループを引率して、図書館、講義棟、課外活動施設(駒場コミュニケーションプラザ北館等)、食堂・購買部、博物館、教員研究室等にご案内しました(左上の写真は永田敬教授)。一号館時計台に登るツアーはとくに好評でした。

今年の懇談会に際して、ご父母の皆さまより、計五二万五千円のご寄付を頂戴しました。これについては、学生向けの図書の購入に充てました。『カーク・オスマー　化学技術・環境ハンドブック』など一七七点が駒場図書館で利用に供されています。これらの図書には、左のような寄贈印が押されています。改めて、御礼を申し上げます。



第七回演奏会

駒場友の会総会当日(五月三〇日)に、高雄有希さんによるピアノ演奏会を九〇〇番教室で開催しました。高雄さんは、十八歳の若さで第六回シドニー国際ピアノコンクール二位(一九九五年)に輝き、スタインウェイ・アーティストにも選ばれている国際的ピアニストです。四年前に教養学部文科三類に入学し、現在は人文社会系研究科の大学院生としてイタリア文学を専攻。これまでに駒場友の会の演奏会に二回出演しています。いずれも大好評を博していたので、今回は多くの高雄ファンの期待に応えるべく、(株)松尾楽器商会のご協力を得て、九〇〇番教室にスタインウェイのフルコンサート・グランドピアノを運び込んでの演奏会となりました。予想どおり、会場はあっという間に五百名近い来場者で埋まり、開演前から熱気に包まれました。

高雄さんは、バッハの平均律クラヴィーア曲集、バッハ作曲・リスト編曲によるオルガンのための前奏曲とフーガ、ショパンのノクターン、リストの超絶技巧練習曲、ラヴェルの「夜のガスパール」など全八曲を熱演、さらに、鳴りやまない拍手に応えて、ショパンのワルツ、ラフマニノフの「赤ずきんちゃんと狼」、ショパンの前奏曲集から「雨だれ」を演奏し、聴衆を魅了しました。

オープンキャンパス

恒例の東京大学オープンキャンパスが八月七日(金)に駒場地区で開催されました。駒場友の会は、高校生に同伴のご父母を対象に大学説明会を開きました。

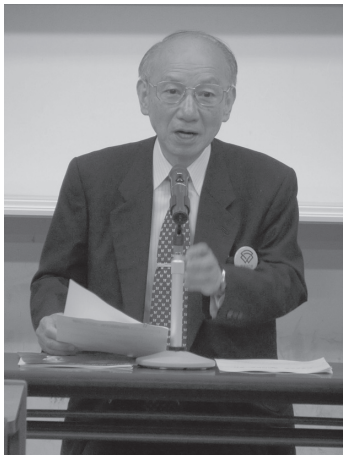
兵頭俊夫教授と遠藤泰樹教授が東京大学の教育の目的や現状についてパワーポイントを用いて説明し、質疑を交わしました。一五〇名定員の会場は満員の盛況となりました。

第六回総会報告

駒場友の会第六回総会を、五月三〇日(土)に教養学部一二一四教室で開催しました。十七時より十八時まで。

総会は毛利秀雄会長の挨拶(下の写真)で始まりました。引き続き、来賓として、一高同窓会、東京高校同窓会より祝辞を頂戴しました。

以下、総会の式次第に従い、議事の内容を報告いたします。すべて、提案の通り承認されました。なお議事の詳細は、駒場友の会のホームページ http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/ に掲載していますので、どうぞご覧下さい。



(一)二〇〇八年度事業報告

瀧田佳子理事より報告がありました。

①懇談会・講演会・演奏会などの開催

新入生父母と学部長との懇談会(五月十七日)／第五回演奏会「混声合唱の楽しみ」(五月二四日)／教養学部説明会：オープンキャンパス行事(八月一日)／「南米のマンドリン音楽：レクチャー・コンサート」(十一月一日)／駒場の樹木をめぐる講演会とイベント：ホームカミングデイ行事(十一月十五日)／「音楽パフォーマンスの夕べ：ペンシルヴァニア州立大学」(三月七日)

②会報の発行、ホームページの拡充

駒場友の会会報は十一号を九月に、十二号を三月に発行。

③会員・会友数

二〇〇九年三月末日現在の会員・会友数は次の通り。終身会員六七名、会員四三四名、会友一、四一九名。一高同窓会員一八五名、東高同窓会員一一六名。計二、二二一名。

(二)二〇〇八年度決算

山本泰事務局長より決算報告(別表参照)があり、佐藤紀志雄監事より収支決算報告書が適切である旨、監査報告がありました。

(三)二〇〇九年度事業計画

瀧田理事より説明がありました。

①懇談会・講演会・演奏会などの開催

雁屋哲特別講演会(四月十七日)／新入生父母と学部長との懇談会(五月二三日)／第七回演奏会：高雄有希スタインウェイピアノリサイタル(五月三〇日)／教養学部説明会：オープンキャンパス行事(八月七日)／南米音楽の演奏会(十月二三日)／駒場の樹木をめぐる講演会とイベント：ホームカミングデイ行事(十一月十四日)

②会報の発行

駒場友の会会報は十三号を九月に、十四号を三月に発行予定。

(四)二〇〇九年度予算案

事務局長より別表のとおり説明がありました。

(五)役員の交代

理事・監事の一部が以下のように交代しました。○理事：桂利行→大島利雄、小島憲道→山影進　○監事：木畑洋一→小島憲道

2009年度駒場友の会予算案

収入の部　単位：円

		予算
1 会費収入		5,600,000
	11 通常会員会費	2,000,000
	12 会友会費	2,800,000
	13 終身会費	800,000
2 寄付収入		800,000
3 雑収入		17,000
	31 預金利息	15,000
	32 その他	2,000
小　計		6,417,000
前年度繰越金		7,382,938
合　計		13,799,938

支出の部

		予算
1 印刷費		650,000
	11 会報・案内等の印刷費	450,000
	12 封筒・便箋等の印刷費	200,000
2 通信費		786,000
	21 郵送費	750,000
	22 電話使用料	36,000
3 事務経費		345,000
	31 事務用品費	50,000
	32 ゼロックス使用料	120,000
	33 インターネット接続料	45,000
	34 会費振込料金負担分	130,000
4 人件費		1,580,000
	41 事務局スタッフ	1,400,000
	42 臨時	180,000
5 運営費		985,800
	51 事務室借料	235,800
	52 光熱水料	50,000
	53 会員証作成費	550,000
	54 その他	150,000
6 事業費		1,500,000
7 寄付		600,000
8 予備費		89,200
小　計		6,536,000
次年度繰越金		7,263,938
合　計		13,799,938

2008年度駒場友の会決算報告書

収入の部　単位：円

		予算	決算
1 会費収入		5,600,000	5,140,000
	11 通常会員会費	2,000,000	1,852,000
	12 会友会費	2,500,000	3,128,000
	13 終身会費	1,100,000	160,000
2 寄付収入		485,000	538,710
	21 正門寄付	−	231,760
	22 その他	485,000	306,950
3 雑収入		27,000	27,348
	31 預金利息	25,000	15,348
	32 その他	2,000	12,000
小　計		6,112,000	5,706,058
前年度繰越金		7,244,428	7,244,428
合　計		13,356,428	12,950,486

支出の部

		予算	決算
1 印刷費		550,000	648,568
	11 会報・案内等の印刷費	350,000	492,278
	12 封筒・便箋等の印刷費	200,000	156,290
2 通信費		936,000	758,386
	21 郵送費	900,000	712,660
	22 電話使用料	36,000	45,726
3 事務経費		395,000	337,601
	31 事務用品費	100,000	37,762
	32 ゼロックス使用料	120,000	116,273
	33 インターネット接続料	45,000	48,182
	34 会費振込料金負担分	130,000	135,384
4 人件費		1,280,000	1,467,053
	41 事務局スタッフ	1,100,000	1,345,053
	42 臨時	180,000	122,000
5 運営費		985,800	936,225
	51 事務室借料	235,800	233,800
	52 光熱水料	50,000	46,893
	53 会員証作成費	550,000	412,712
	54 その他	150,000	242,820
6 事業費		1,900,000	1,187,955
	61 5.17父母との懇談会		172,060
	62 5.24柏葉会演奏会		24,255
	63 8.1オープンキャンパス		0
	64 11.1マンドリン演奏会		387,890
	65 11.10ホームカミングデイ		7,500
	66 3.7PSU音楽パフォーマンス		9,000
	67 4.17美味しんぼ講演会		58,170
	68 正門修復募金		3,240
	69 その他		525,840
7 寄付		0	231,760
8 予備費		65,200	−
小　計		6,112,000	5,567,548
次年度繰越金		7,244,428	7,382,938
合　計		13,356,428	12,950,486

(六)会長より「一高同窓会担当専門委員会(委員長は竹田晃副会長)」の設置について説明があり、また、本間長世前会長を本会の「名誉会長」とすることが提案され、承認の後、すべての議事を終了しました。

お知らせ

駒場友の会の会員(終身会員と通常会員)が東大生協に加入する資格が認められました(会員のみの特典です)。詳細は同封のチラシをご覧下さい。

矢内原忠雄先生と教養学部の構想

川西　進

個人的な想い出から始めるのを許していただきたい。矢内原先生(左写真)は、私にとり、幼い時から、敬して拝すべき先生だった。それは先生を学生時代から知っている親から聞く話で想像したことであったが、初めて先生にお会いした時の強い印象で定着した。一九四三年二月、理学部学生だった九歳上の兄が急死し、その葬式、埋骨など一切を先生が司られた時である。兄は、旧制一高に入学し寮生活に入ると間もなく、先生が東大を追われた翌月から刊行された月刊個人雑誌『嘉信』を購読、翌年の秋からは先生の家での毎日曜の聖書集会に出席することを許されていた。若い弟子を天に送った先生は、長子に先立たれ悲嘆に暮れる両親と共に悲しみ、祈り、遂には確かな希望と喜悦を与えてくださった。五年生の私は、それをはたから見るだけで、どのような心の働きによるのかは分からなかったが、先生が、親にとり、家族全体にとり、かけがえのない存在、これから先も、私共を助け導いてくださる方だと思った。

その二年後に戦争は終わり、先生は東大に復帰され、家庭での集会を閉じ、翌一九四六年の三月から御自宅近くの今井館で、毎日曜、公開聖書講義を行われた。私もその翌々年頃から出席し、エレミア書、ルカによる福音書などを学んだ。先生の「講義」は、教会の「説教」というより学校の授業に近かった。人間の生き方についても説かれたが、それは聖書の登場人物の置かれている状況を学問的に考察し、その人の立場に身を置いた上でのお話だった。聖書学、神学の専門領域に入られることはなかったが、聖書の文学としての迫力、美しさを指摘されることもしばしばだった。

これは大学の古典講読の授業に通じるものだった。その点では、東大を追われて一年余り後、聖書集会と同様、御自宅で始められた「土曜学校」講義も同じだった。講義は二部に分かれ、毎週土曜日午後の前半の第一部は人文系の世界の古典が、後半の第二部は先生の御専門の経済学関係の名著がテキストに選ばれた。第一部はアウグスチヌスの『告白』に始まり、『神の国』などを経て、一九四二年四月、最初の米機東京来襲があった日にダンテの『神曲』が読み始められ、それが三年後に終わると、夜間大空襲の続く一九四五年五月からミルトンの『楽園喪失』となり、終戦後の四七年五月の読了と共に「土曜学校」は閉じられた。これらの講義は、岩波版の『全集』には収められなかったが、その速記録が後に全十巻に編集され、みすず書房から出版された。平川祐弘兄が同書五―七巻収録の『神曲』の書評で述べたように、先生の「下調べは綿密……知的感受性は鋭く……数多の小専門家の学術研究以上に聞くべきことの多い」ものだった。先生の教養学部、教養学科の理念も、このように聖書と古典を読んで居られるうちに、形成されていったのではないだろうか。

先生は終戦の年の十一月末から東大経済学部の教壇に戻られ、新制大学の発足と共に教養学部、教養学科の創設に当たられた。私共は幸いにもその第一回生として卒業し、総長となられた先生から、次のような忘れ難い「はなむけの辞」を頂いた。「教養学士という称号をもつ卒業生を出すものは、東京大学が最初且つ唯一である」。この卒業生を育成した教養学科は「進駐軍の示唆によったのでもなく、既存の学部の一部であった学科の分離でもなく、内外いずれの大学の制度の模倣でもなく、まったく新制東京大学の独創的な構想によるもの」である、と。

この「構想」の発端を辿れば、先生御自身の師である二人、内村鑑三と新渡戸稲造にまでさかのぼるであろう。では二人の師はどこでその理念を得たのだろうか。その答えは矢内原先生御自身がされている。先生は教養学部長になられた年の夏、北海道大学のYMCA主催の講演会で「新制大学の理想と札幌農学校」と題して話された。これは残念ながら『全集』に収録されていないが、『嘉信』の同年九月号で、先生は次のように報告された。「聴衆は北大教養部の新入生百名ばかりであった。その最前列の中央に、宮部老博士が坐って居られた。私は新制大学の理想が札幌農学校の精神にほかならぬことを話し、その生きた証人として宮部先生がここにあられることを語った」と。「宮部老博士」とは内村、新渡戸と同じ農学校の二回生であり、植物学の宮部金吾北大名誉教授である。「農学校の精神」といえば、同校初代の校長W・S・クラークが持参したリベラル・アーツの理念、その母胎であるアメリカのリベラル・アーツ・カレッジにまで思いが及ぶが、それはまた別の機会に論じられるべきであろう。

(東京大学名誉教授、フェリス女学院大学名誉教授)

知性とこころ

遠山敦子

去る五月三〇日、今年度の駒場友の会総会が開かれた。実はその日が、駒場に教養学部が発足してから丁度六〇周年の記念日にあたるとは、意義深いめぐり合わせであった。駒場キャンパスで展開される大学一、二年生に対する本格的な教養教育は、いまや日本の大学で唯一のシステムであり、日本の未来を託せる若者たち自身にとっても、日本の未来にとっても誠に貴重な教育機会となっている。

この日、私はたまたま美術館(駒場博物館)を訪れ、教養学部の創設者である矢内原忠雄先生の特別展を拝見した。同展は、戦後の混乱期に高い理想を掲げて駒場の仕組みを作られた偉大な学者の人生と信念の軌跡を物語る貴重な展示内容であった。私もかつて一夏、山中湖での聖書研究会に列したことがあり、その清冽な生きざまに感銘を受けたことを思い出す。その理想は、今や現実にどのように生かされているのだろうか。

偶然にも昨年は、私が駒場へ入学してから五〇年目にあたり、この春には当時のクラス仲間で文集を作り、また会合をもった。しかし、不思議なことに、駒場での授業や教官たちの思い出を綴り、語る者はほとんどおらず、駒場での教養教育の手応えが希薄であったのか、あるいは、そこで得たものが一人ひとりの生きざまに深く沈潜しているからか、測りかねたのであった。

この六〇年間、大学は大学紛争をはじめ大きな試練に出合い、時代の変化もあり様々な改善の道を辿ってきたと思うが、駒場での一つの大きな転機は一九九〇年代の前半であったろう。八〇年代の終わりに大所高所から大学の在り方を論ずる大学審議会が文部省に初めて設置された時、私は担当課長であった。その後、大学設置基準の大綱化など累次の答申が出された。そんな折、各大学で教養部が解消されていく中、東京大学教養学部は自ら抜本的なカリキュラム改革や英語教育の改善など、画期的な教育の充実策に着手された。私は高等教育局長として大いに力強く受け止め、敬意を表した次第である。『知の技法』などの名著が一世を風靡し、各大学における教養教育の取り組みに刺激を与えていただいた。

そして二一世紀のはじめ、思いがけず大臣として、当時構造改革の嵐が吹きすさぶ中、国立大学を安易な民営化論から守り、かつ、より自主的自律的に運営できるよう本来あるべき国立大学法人への道を拓く役割を果たすことになった。知の世紀をになう大学の基盤を崩してはならないとの思いが判断の根底にあった。

このところ法人化で大学運営の自在さが増した故か、最近の駒場キャンパス環境の充実ぶりは、特記に値する。もともと緑に恵まれ、季節ごとに豊かな樹木の奏でる美しさは格別であるが、最近、駒場池の整備もすすみ、西端の小さな湧水もせせらぎをつくり、ファカルティハウスや図書館、学生たちが楽しげに集う建物なども立ち、まことに恵まれたキャンパス風景となった。学生たちにとって、今や学びと思索のための物的な舞台は十分整った。次は教養教育の質の充実である。

私は、是非ともここで学んだ学生たちが、真の知性への憧憬とその獲得への努力と意欲、そして、あの矢内原総長が目指された精神の練磨、つまり人として品格あるこころを自らの中に培って欲しいと思う。知性とともに、自らを律し他者や社会に貢献するこころがあってこそ、初めて教養ある人格といえるのである。東京大学には、そのような人格を世に送り出す責務があるのではないか。

それには、導き手である教員の皆さんが日々の授業や学生とのふれあいの中で、折々に生き方のDignityというべきものを垣間見せて頂きたい。今や学生たちの価値観も変わり、駒場での青春の日々を謳歌する若者への訴えは容易ではないだろう。しかし、鋭敏な心とすぐれた才能をもつ若者たちは多く、彼らに真剣に訴えるならば、必ずや深く刻印を残すと思う。大学側のそんな意図が応援できるならば、駒場友の会は喜んでできるだけの支援をさせていただきたい。

(元文部科学大臣、新国立劇場運営財団理事長、駒場友の会副会長)

駒場友の会会報　第13号
2009年9月15日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電　話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メール
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページ
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/
デザイン・印刷　株式会社双文社印刷
http://www.sobun-printing.co.jp

爽やかな風に包まれてゆったりと
くつろぐことのできる
フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場
駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際に
注文なさったコーヒーは、支払いの際に会員
会友証を提示下さいますと無料となります。
営業時間　11:00～14:30、17:00～21:00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内